

第145回くらしの植物苑観察会 2011年4月23日(土)

桜草を育てよう

山村 聡(国立歴史民俗博物館)

桜草は、シベリア南部から中国東北部、朝鮮半島、日本では四国・沖縄を除いた、北海道から東北の低地、関東から中部・山陰・九州の高原の湿性地に自生しています。江戸時代になると、二次的な自生地が荒川下流の原野に生まれ、埼玉県のとしまヶ原、戸田ヶ原、東京都北区の浮間ヶ原などに大群生地が生まれました。1920(大正9)年に、としまヶ原が桜草の自生地として国の天然記念物に指定され、1952(昭和27)年に国の特別天然記念物に指定されました。今日でも、自然状態で残された大群生地を見ることが出来ます。

桜草が栽培されるようになったのは、江戸時代の中頃、野生の桜草の中から探し出された変わり花をもとにして多数の品種が作出されています。最盛期では300種を超える品種が記録されており、今日でも江戸時代に作出された南京小桜や駅路の鈴など、多数現存しています。

桜草は、可憐な美しさがあり、花色・花形・花弁など、さまざまな特徴をもった品種が多くあります。栽培も比較的容易でよく増えます。近年では、八重咲きの品種が作出されています。

ぜひ、この機会に桜草を育ててみませんか？

花の特徴

花 色 : 紅色・桃色・白色・紫色・淡紫色・とき色・絞りなど。

花 形 : 標準型・細弁・広弁・重ね弁・基部の細い桜弁など。

花 弁 : 桜弁・丸弁・梅弁・波打ち弁・獅子弁・微かがり弁・かがり弁  
深かがり弁など。

花 容 : 平咲き・浅抱え咲き・梅咲き・星咲き・玉咲き・つかみ咲きなど。

花模様 : 無地・目白・目流れ・内白・底白・染出し・曙白・刷毛目・絞り

爪白・覆輪など。

花冠の向き : 受け咲き・横向き咲き・垂れ咲きなど。

花柱の形 : 長柱花・突出長柱花・僅長柱花・短柱花・同長花

大きさ : 小輪花(30mm未満)・中輪花(30~40mm未満)

大輪花(40~50mm未満)・巨大輪花(50mm以上)

## 育て方

- 置き場所：秋から春にかけては、日あたりで風通しの良い場所  
梅雨から秋にかけては、半日陰で風通しの良い場所
- 培用土：市販されている草花培用土、朝顔や菊を育てた残土など  
(くらしの植物苑では、赤玉土の小粒と腐葉土を6：4の割合で使用)
- 水やり：表面が乾いてきたら与えるのが基本です。  
(夏の高温時期は早朝又は夕方以降に、冬の低温時期は午前中の暖かい日に与えます)
- 肥料：くらしの植物苑では、元肥として緩効性肥料を培用土と一緒に均一に混ぜて使用します。(培用土1ℓに対して3g混ぜて使用)  
市販されている草花培養土は、すでに肥料が入っていることがありますので、その際は必要ありません。  
また、花が終わった後、水やりの時に薄い液体肥料(1000～2000倍)を2～3回与えます。
- 植え替え：11月～2月が適期です。  
増し土：花が終わった後に2cm程度培用土を補充します。  
(1度に補充しても良いですが、2・3回に分けて補充した方が良いでしょう)
- 病害虫：ヨトウムシ、コガネムシ、根こぶ線虫  
高温多湿の際に白絹病が発生することがあります。

自生地の桜草  
「田島ヶ原」



現存する最古の品種  
「南京小桜」



八重咲き品種  
「磯牡丹」



\*参考資料：「色分け花図鑑 桜草」(Gakken)・さくらそうへの招待(さくらそう会)  
解説シート

.....

**次回予告** 第146回くらしの植物苑観察会 2011年5月28日(土)  
「関東平野の里山の生い立ち」 辻 誠一郎(東京大学大学院)  
13:30～15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要